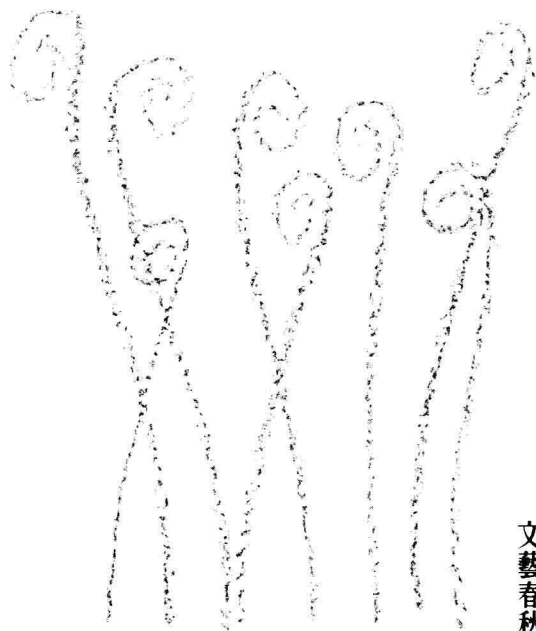


平岩弓枝  
女の幸福



平岩弓枝  
女の幸福



文藝春秋

# 女の幸福

昭和五十三年十月二十五日 第一刷

定価 七八〇円

著者 平岩弓枝

発行者 檜原雅春

発行所 株式会社 文藝春秋

〒一〇二 東京都千代田区紀尾井町三

印刷所 大日本印刷

製本所 矢嶋製本

万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

© Yumie Hiraiwa 1978

Printed in Japan

目次……………女の幸福

摩耶山……………5

二人目の男……………19

妾の家……………32

初夜……………47

若い母……………60

忍従……………72

残されたもの……………85

生と死……………99

再婚……………112

寒い夜……………125

忍の日……………139

父と息子……………152

伊豆山……………166

我が子……………179

花の季節……………191

歲月……………204

愛ある日々……………217

女の幸福……………230

裝幀 題字  
粟屋 中田  
充 功

女の幸福



## 摩耶山

摩耶山の春は遅かった。

岩を割って落ちる雪解け水が、岩魚いわなの棲む川へ集って流れる沢のところどころに点在する小さな村落も、長い冬ごもりから覚めるのは、その年の桜前線が日本を縦断して、北海道あたりまで行った時分のことである。

大滝千加子の生まれた山熊田の村は、摩耶山の麓の村の中でも、とりわけ山の深みにあった。豪雪をもって知られる庄内地方の、しかも山奥では、雪は少ない年でも四メートル以上も積って、冬の間は全くの陸の孤島となった。

車は勿論、馬糞さえも通れなくなる。

雪に閉された家々からは時たま、男達が狩に出る他は、もっぱら機織りの音が聞えていた。この地方に古くから伝わるぜんまい紬の機織りである。

千加子の母親のみののは、山熊田きっての、ぜんまい紬の機織りの名手であった。



昭和十三年の四月の末である。

その年は、いつもより雪解けが早かった。ぼつぼつ山へ入れるとわかると、どの家も籠を背負って早朝から家を出た。

体力のある者は前夜から山へわけ入って一夜をあかす。

ぜんまい摘みであった。摩耶山に多い山菜の中で、春一番に雪を割って顔を出すぜんまいをこの村の人々は待ちかねて摘みに出る。

その夕方に、千加子の家でも父の音三と母のみのが揃って身仕度して山へ入った。留守番は、もっぱら子供達の役目であった。

長男の松太郎は十八歳になっていて、すでに一人前に山仕事が出来るようになっていたし、長女の千加子は十五歳、次女が多美子が十歳であった。

母が働きに出ている時の炊事役は千加子で、その時も裏の小川で米を洗っていた。

思いがけず、小川の上の小道に人の声がして、顔を上げると、もうすぐ近くに男が二人立ち止まってこつちをみていた。

「お千加ちゃんかね、ちょっと見ない中に、大きくなったなあ、いや、大層な別嬪さんになったじゃないか」

先に声をかけた男の顔は、千加子も知っていた。毎年、春になると、ぜんまい紬を取りにくる東京の紬屋「喜多村」の番頭で、坂井清三郎という男である。

千加子の母の織るぜんまい紬の大方は、長年の約束で、もっぱら「喜多村」へおさめることに

なっている。大滝家にとっては、大事なお得意さんであった。

「いらっしゃいまし」

丁寧に腰をかがめて千加子はもう一人の若いほうをそつとみた。これは、はじめての客であった。鳥打帽をかぶり、洋服で洋鞆を下げている。

「うちの若旦那だよ。久志坊っちゃん、これがおみのさんの長女の千加ちゃんでございます」  
番頭が紹介し、久志坊っちゃんと呼ばれた青年は、いくらか照れくさそうに頭を下げた。

「はじめまして、北村久志です」

千加子は、なんといつてよいかわからず、まっ赤になってお辞儀をし、慌てて家へ走り込んだ。  
「兄ちゃん、東京から……」

妹に知らされて、庭で薪を割っていた松太郎が客を迎えに出た。その間に千加子は囲炉裏に客用の座布団を運んだ。

「そうかい、じゃ、音三さんもおみのさんも明日の夕方にならないと帰らないな」

番頭の坂井が松太郎と話しながら、旅装を解き、早速炉ばたへ来た。春とはいっても、山の中で、日が暮れるとかなり冷える。

「今年は何が少なかったそうだが、それでも中継からここまで五時間もかかったよ。どうも年のせいかな、来る度に道のりが長く感じられてねえ」

馴れない山道を五時間も歩き続けて仕入れにやって来れるのも、あと何年かと、坂井は笑った。  
「それでなくとも、戦争がはじまってから統制、統制で、こっちもどうかね。生糸なんか、まだ

思うように入ってくるようかね」

松太郎が炉に薪をくべながら、大人っぽい口調で答えた。

「今のところは、昔からの付き合いだで、なんということもねえだども……」

「そいつは有難いが、だんだんやりにくくならなけりゃいいがね」

台所で千加子は茶を入れながら、兄と坂井のやりとりをきいていた。

「これが山刀っていうものですか」

不意に声をかけられて、千加子は茶碗をとり落しそうになった。北村久志が、台所の入口においてある狩の道具を眺めている。

「これ、なんです」

鉄の輪を指した。

「罨だども……」

「なにを捕るんですか」

「それは、熊だども……」

「熊なんか出るんですか」

炉ばたから、坂井が声をかけた。

「出ますとも、坊っちゃん、これからが熊打ちの季節ですわ。熊さんもぼつぼつ冬ごもりの穴から出て、餌をさがしに下りてくる。今日、来た道なんぞも、うっかりすると、熊にばったりなんということがよくあるそうですよ」

「熊のほかにもどんなものが捕れますか」

久志は、あくまでも千加子へ聞いてくる。

「うさぎとか……むじな、狸も狐も……私たちも捕れます」

その時、裏口から本家へ遊びに行っていた多美子が帰って来て、漸く、千加子は久志の質問から解放された。

その夜は、階下の大きな部屋に、坂井と北村久志を泊らせ、松太郎は炉ばたに、千加子と多美子は二階といつても屋根裏部屋だが、機織り道具のおいてある脇の小部屋へ布団を敷いて寝た。

多美子は、いつものように、すぐ健康的な寝息を洩らして眠り込んだが千加子は眼が冴えてしまつて、なかなか寝つかれなかつた。

山の農家の朝は早い。

夜明けにはもう起きて、飯の仕度をし、それから納屋へ行って、前から摘みためてある今年のぜんまいを板の間へ並べながら、ぜんまいについている綿毛を採って行く。

ぜんまいの綿毛は、新芽を保護するためのもので、雪水からぜんまいを守るための自然防水の役目を持っている。その綿毛を真綿にまぜて糸を作つて織るのがいわゆるぜんまい紬であつた。

「ほう、こりゃ大変なぜんまいだね」

納屋の戸口から久志の顔がのぞいた。

「その綿毛で、ぜんまい紬が出来るのか」

入って来て、籠の中の綿毛をつまんでみる。それからちょっと距離をおいて、そのところかなり出廻っていた国産の単玉写真機を慣れた手つきで構えた。

「こんなものが糸になるんだね」

にこりと笑いかけた顔が清潔な感じで、つい、千加子の気持ちも和んだ。

「今年は雪が少なかったから、綿毛が少ないけども、色が白いのです」  
学校で習った言葉で喋らなければ、と千加子は懸命になった。

「雪が少ないと綿毛が少なくて、色が白い……？」

「ええ、雪が多いと綿毛も多いが、色が黒いです」

「年によって違うわけだね」

「……んだ……」

方言が出て、千加子は赤くなった。久志は別に笑いもしない。

「織り上った紬の色も違ってくるわけだね」

「だども、今年のぜんまいの綿毛と、今年のと是一緒に出来ねえっす」

「成程……そういうことだねえ」

いつの間にか、久志が手伝っていた。ぜんまいから綿毛をはずして、籠に入れる。

「ぜんまいはどうするの」

「お菜に煮ます……干して貯えたり……」

「ああ、そうか」

久志が笑い出し、千加子も笑った。

「君は、ぜんまい摘みには行かないの」

「行きます。お父さんやお母さんのように深い山までは行きません……近くの山なら入ります……」

「案内してくれませんか。どんなところにぜんまいが生えているのか……入ってみてみたいんだ」

「近くなら御案内します……」

母屋へ戻って朝食をすませたが、番頭の坂井は、まだ寝ている。

「お疲れのようだと、そつとしておぐべ」

松太郎は薪割りをはじめ、多美子は本家へ行った。このところ、本家の祖母から、ぼつぼつ機織りの手ほどきを受けている。

「千加ちゃんに、山へ案内してもらっていいですか」

久志が松太郎に訊き、松太郎が

「危なぐねえとこさ行けや」

と妹に注意した。

山といっても、家の裏からもう山である。それでも、炭焼きの通う細い道が自然に出来ていて、そこをたどって行くと、山のふところへ出て行く。木は新芽をふき出したばかりであった。

山の冷気はすがすがしく、頭上の鳥の啼き声が楽しかった。

千加子は腰に手籠を結びつけていた。木綿の着物に、紺のモンペをはいている。足は藁草履だった。長い髪をおさげにして、歩く度に、おさげの先が宙に躍った。木洩れ陽のさす山道であった。

ところどころに、すみれが咲いていたりする。かたくりの花もあった。そんな草花の名を、久志はよく千加子に訊ねた。男のくせに野の花に興味があるらしいのが、千加子には可笑しかった。「熊なんか出ないかな」  
いくらか山が深くなってくると、久志が笑いながら呟いた。

「ここら、滅多に出ません」

「出ることもあるのだろう」

「わたし、あったことありません」

やがて、山の崖へ出た。ぜんまいは平地には生えず、必ず崖のふちのごつごつしたところに顔を出す。

「そこにも、ここにも生えてるでしょう」

手早く、千加子は摘みはじめた。

片手で崖の木の枝などにつかまって、体を支えながら、出来るだけ体をのり出して遠くまで手をのばして、ぜんまいを摘む。

千加子にならって、久志も摘みはじめた。最初は用心深く、一本一本採っていたのが、次第に

調子に乗って大胆になって行く。

「危ねえっす……」

気がついて、千加子が叫んだのと同時だった。

久志が片足をのせていた岩がぐらりと崩れた。慌ててのばした手は小枝にも届かず、あっという間に久志の体は崖をごろごろとこぼれ落ちて行く。

「久志さん……」

夢中で叫び、千加子は久志を追って、崖を這い下りた。この程度の岩場には馴れていたが、それでも気がせくのと不安とで、全身が慄えた。

久志は数十メートルも下の窪地に倒れていた。そこまでたどりついてみると、落ちる際にどこかを打ったのか、気を失っている。

「久志坊っちゃん……」

ゆすぶってみたが、返事がなかった。途方に暮れて千加子は、以前、兄の松太郎が、やはり足をすべらせて転落し、気絶した時に母のみのが湧き水を飲ませたのを思い出した。

崖を慎重に千加子は伝い下りた。そこに谷川がある。清冽な水であった。口に含むと氷のように冷たい。一口は飲み、もう一度口に含んだ。

大急ぎで崖を上る。上るほうは下るよりも楽であった。

久志の顔をあおむけにし、その上に上体をかぶせるようにして、口に口を近づけた。

水の半分は久志の顔の上を流れたが、思いきって唇に吸いつくように口を合せると、なんとか



咽喉を通ったふうである。

「久志さん、久志さん……」

抱きついて両手で肩をゆすぶると久志がゆっくり眼をあげた。不思議そうに千加子を見て、やがて気がついた。

「ぶざまなところをみられたな」

唇の水に気がついて、指を持って行った。なんとなく、千加子も手で自分の口を拭う。

それがかえって久志に気がつかせる結果になった。

「君……」

どういう感情の動きだったのか、千加子にもわからなかった。

気がついた時は、息もつまるほど、久志に抱きしめられていた。のけぞった千加子の唇を、久志が強く吸った。

言葉はどちらにもなかった。

長いこと、千加子は久志に抱かれていた。体を起した時、久志は千加子から眼を逸らして、遠くの山脈をみた。

「東京へ帰ったら、迎えをよこすよ」

ぼつんといった。

「俺の嫁さんになるかい」

千加子は度を失って、返事が出来なかった。なにか大変なことが起ったに違いないと思ったも